リフォームをめぐる人々 ⑨

月1回掲載

三井のリフォーム 住生活研究所 所長　西田恭子

個人輸入の食卓テーブル

海外旅行でインテリア商品を買い込んでくる人は多い。置物であったり、スタンドであったり。そのままで使えるものは、それが部屋に溶け込むインテリアとなる。また中にはクロスやタイルを買い込んできて、リフォームでどうにか使ってほしいという事もある。旅先の思い出が詰まったものを我が家のインテリアに組み込みたいという気持ちは、よくわかる。なぜなら私もよく買い込んでくるタイプだからだ。

仕事を離れて完全リゾートのバリ旅行に行った時、そこで食卓テーブルを買ってきた。

「家具工場に行く時間はあるかしら?」。太陽と海のリゾートに浸った数日後、さあ午後には帰国という時になって、私は我慢できずにタクシーを飛ばした。インドネシアはヨーロッパ家具の工場として、よい製品がある。

仕事に関することは一切しないと決めて出た旅なのに、気が付けば工場内のショールームにいた。大量の家具を見るのも、帰国の飛行機時間との闘いだ。だがそこは職業柄そつなく見回し、ひと回りした時には、すでに買うものは決まっていた。

ココナッツの実をチップ状にして一枚ずつ張り付けて仕上げているテーブルと椅子。そのナチュラル色に魅せられて、自分で勝手にこれは工芸的価値があると決め付けた。

さっそく買う交渉に入ったのだが、相手は「売らない」という。双方片言の英語だから大変だ。どうやらふらっと来た旅人が、ひょいと買うようなものではなく、それなりのバイヤーと交渉する商品だったようだ。もっとリーズナブルなものをすすめられたが、私には関心がなかった。

私の執念に、とうとう交渉は成立した。もちろん値引き交渉も抜かりなかった。こんなに簡単に家具を個人輸入していいものだろうか? と思う間もなく、帰路についていた。

そんな旅の思い出と、交渉の醍醐味の詰まったテーブルセットは私にとっては宝物だ。どんなに家を改装しようとも、あるいは引っ越そうとも、そのテーブルを中心に部屋作りが進む。好きなもので、本物と思えるものを大事にしながらの暮らしは、何よりも変えがたい。

また、中国で買ってきたという格子の板を、リフォームするにあたり使いたいという人がいた。七〇(センチ)四方の大きなものではあったが、壁掛けの照明器具として見事に変身をとげた。思い出の格子の板は、リフォームを機に部屋に溶け込み、好きなものに囲まれて暮らす喜びを創り上げてくれる。

家の歴史は家族の思い出とともに進む。その思い出を写真立てばかりに独占させるのはもったいない。

西田恭子氏のプロフィール＝一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。昨年より新設した「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。